永山盛孝 Nハウス

1995年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

沖縄出身の建築家から、沖縄には「テーゲー」という言葉があると教わりました。

英語で言えば「about」という感じでしょうか、たとえば「あいつはテーゲーだから…」と言えば、「あいつは大雑把だから」、「いいかげんだから」という意味になるらしく、本来はいい意味には使われないのだそうです。そして、そういう言葉があり日常的に使われているというのは、沖縄には几帳面な人は少なく「テーゲー」な人が多いからだという説明でした。しかし一方で「テーゲー」には「鷹揚である」とか「中庸である」とか「なんとなく」という意味もあるらしく、こちらは、「杓子定規」の反対語のニュアンスを持つ肯定的な意味あいになるのだそうです。

友人の言葉から、いつのまにか私の中に「沖縄の人＝テーゲー」の短絡的な図式（認識というべきかもしれません）が出来上がってしまっていました。ところがその図式＝認識は、ある建築家の自邸を訪ねたときに、一瞬にして砕け散ることになりました。

そう。それが今回の訪問先『Nハウス』であり、設計者の永山盛孝さんでした。

今年（2008年）の3月、沖縄建築士会に招かれて浦添市で住宅に関する講演会をする機会があり、その折に見学させてもらったいくつかの建築家の自邸のひとつが『Nハウス』でした。ふらりと立ち寄った見学だったので、滞在時間はさほど長くはありませんでしたが、この住宅で永山さんや永山夫人と交わした会話、また、そこで見たもの、感じたもの、考えたことは、あとあとまで印象に残りました。

先ほども述べたとおり「沖縄の人＝テーゲー」という認識が、永山さんにお目にかかったとたんに粉砕したことを、まっ先に書いておかなくてはなりません。玄関のドアを開けると、戸口に立った永山さんはアイロンのかかった真っ白なシャツを着用していて、そのボタンは一番上の首元までキチンと掛けられていました。アプローチと玄関まわりの緻密なデザインを横目で観察しつつ、初対面の挨拶を交わしただけで、永山さんが非常に几帳面な建築家で、「テーゲー」とは対極の性格の人物らしいことがはっきり分かりました。余談になりますが、奥様の話によれば、永山さんはお休みになるときも、パジャマの襟元までボタンを掛け、身体の両脇もキッチリ、シーツで巻き込んでまっすぐ上を向いて寝るのだそうです。思わず私は、「ミイラみたいですねぇ…」と、初対面の方に対してあるまじき失礼なことを口走ってしまい、永山さん夫妻の顰蹙（ひんしゅく）を買いました。

建築作品は、それを設計した建築家の思想や建築に対する姿勢だけでなく、その建築家の性格や人となりが少なからず反映されるものですが、自邸となるとそれがいっそう顕著に、いっそう生々しく現れるものだと思います。

建物内部に足を踏み入れ、2階の広々とした居間・食堂に通されて、そのことをあらためて強く感じないわけにはいきませんでした。目には見えませんが、室内は隅々にまで、整然とした秩序感と謹厳な気配に支配されていました。

中央に黒光りのする長大なテーブルが据えられ、そのテーブルを挟んで黒革の食堂椅子が姿勢正しく5脚ずつ向かい合って居並ぶ様は、食堂というより一流企業の会議室のようで、酒呑みの私は「こういう食堂では、だらしなく酔うわけにはいかないんだぞ！」と自分にきびしく言って聞かせました。また、テーブルと食堂椅子はもちろんのこと、壁に設置されているスピーカーに至るまで、突き当たりの壁に造り付けたキャビネットを中心にして、寸分の狂いもなくシンメトリーに配置されているせいで、どこか祭壇的な気配が醸し出されていました。

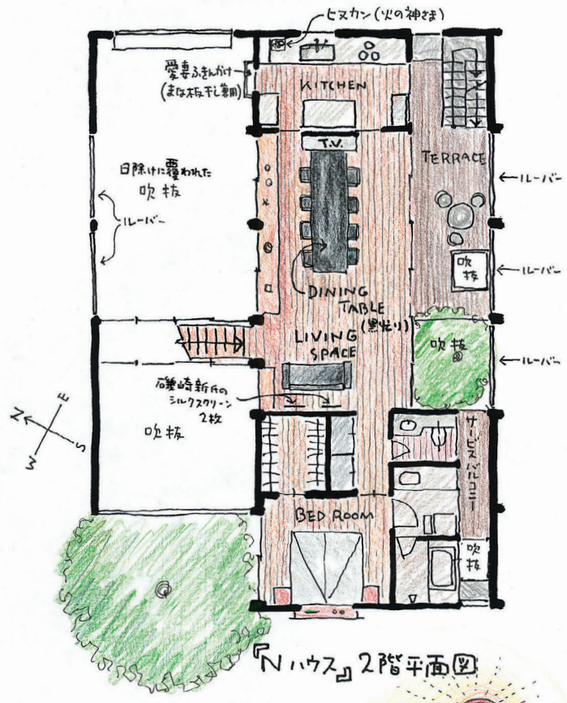
室内の第一印象は、整然、秩序、謹厳、シンメトリーでしたが、この住宅の特徴はそれだけではありません。目を転ずれば、居間・食堂の南側には半戸外的に囲われたテラスが広がり、北側の窓の外は上部を日除けのルーバーで覆われた、ここもどこか半戸外的に感じられる大きな吹き抜け空間がドーンと控えています。こうした「プランや空間の構成」こそが、この住宅のテーマであり、永山さんの真骨頂にちがいありません。

この住宅は、まず敷地全体をコンクリートのフレームによって囲い取り、その中を部屋の用途に応じた面積と容積に割り当てていく方法で作られています。実際にこの住宅の中を歩き回

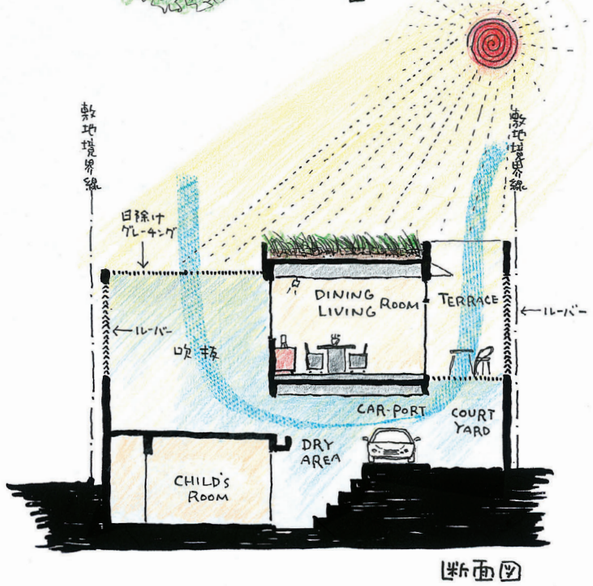
上――2階食堂を居間の方向から見る。この居間・食堂は、右手のテラスと、左手の窓外の全面をグレーチングの日除けに覆われた大きな吹き抜け空間とによって挟まれている
下――道路側のファサードは、一見そっけなく見える。白色のパネルは寝室の出窓。ガラスを嵌め込んだ極小の丸窓がアクセントになっている

屋上テラスは、断熱効果を高めるためイネ科の千茅（ちがや）で緑化されている

キッチンカウンターの隅にはヒヌカン（火の神さま）が祀ってある

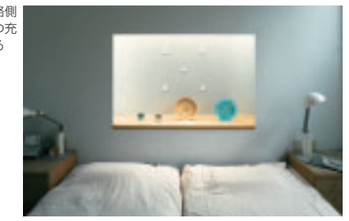


『Nハウス』2階平面図



断面図

落ち着いた雰囲気のインサイド・テラスで話す永山さんと私。永山さんの背後はコンクリートフレームの間に嵌め込まれた通風用のルーバー



寝室の出窓は、道路側から視線を遮りつつ充分な採光を確保する

永山家のランチ。沖縄野菜のたっぷり入った具だくさんの味噌汁とゴーヤその他の漬け物。美味！

ってみると、囲み取られた空間の多くが外部空間であることに気づきます。しかも、屋内空間と屋外空間は阿吽の呼吸で分かちがたく入り交じって、空間の変化や、光と影の織りなす見事な効果を生み出しているのです。炎暑の日射しにしろ、台風時の暴風雨にしろ、沖縄の自然の力はハンパではありません。その強すぎる自然の力を建築的に巧みに制御して、内部に取り込んでいる様子は、短辺方向の断面にはっきり現れています。先ほど述べた居間・食堂の空間は、吹き抜け、ドライエリア、カーポート、コートヤード、テラスなどの外部空間に大きくU字状にすくい上げられて、宙に浮いている形になっています（断面図参照）。

屋外空間には、当然ながら日が射し、雨が降り込み、風が吹き抜けていくのですが、吹き抜け上の屋根のレベルを広々と覆う日除けのグレーチングや、外壁に嵌め込まれた、視線を遮り風を通す水平のルーバーや、光を通し雨を防ぐガラスの庇などによって、荒ぶる自然は温和（おとな）しく飼い馴らされています。沖縄の気候風土の中で厳しい自然を手なずけ、折り合いを付けて、これを積極的に住宅内部に取り込んで共存を図った…これが、『Nハウス』の見どころであり、最大の魅力なのだと思います。

ところで、一見、沖縄の住宅らしく見えない『Nハウス』が、実は沖縄の伝統的な住宅から多大な影響を受けていると永山さんは言います。外部に対しては閉鎖的に見えるけれど、いったん中に入ると、格式張らずざっくばらんなことや、動線が幾通りもあってケースバイケースでそれが自在に選べることなどは、伝統的民家『中村家』から学んだものなのだそうです。

「一見、沖縄の住宅」と言えば、「ヒンプン」であり、「アマハジ」であり、「赤瓦」であり、「シーサー」であり、「漆喰」であり、「石垣」であり、「福木（ふくぎ）」であるわけですが、そうした沖縄特有の素材と常套手段に頼らずに「沖縄建築の魅力を引き出したかった」気持ちは私にも痛いほど分かります。沖縄で建築の仕事をしていたら、おそらく私もそうしたに違いないからです。

1階コートヤード。ヒンヤリした気持ちのいい空間。日射しの高い夏場にはスノコを透過した太陽光が美しい縞模様を描くとのこと

永山さんは、設計ノートを私に見せてくれましたが、そこには、伝統的な沖縄建築のヴォキャブラリーが箇条書きにしてあり、それぞれの項目の頭に、
◎（使用する）、○（副の素材で表現する。取り組む。）、×（使用しない）の印が付してあり、前述の「ヒンプン」、「アマハジ」、「赤瓦」、「シーサー」、「漆喰」、「石垣」は見事に落選して、全部×印でした。そして、頁の下段には「新しい沖縄の形態を造り出す」という宣言のようなメモ書きが、赤ペンでくっきりと縁取りしてありました。

永山さんは、誰もが手軽に用いる沖縄の建築言語に頼って設計することで、類型的、紋切り型の沖縄建築になることを嫌い、沖縄建築の空間の特質に迫る永山盛孝ならではの独自の沖縄スタイルの住宅を提案したいと考えたのです。「直喩」ではなく「暗喩」でいこう！、磯崎新氏からも大きな影響を受けたと語る永山さんは、「磯崎好みの言葉」で、そう考えたのではないでしょうか。

ともあれ、この設計メモの中に、私は永山さんがこの住宅に賭けた並々ならぬ意欲と、一種の反骨精神を感じて、心中ひそかに拍手を贈ったのでした。

ところで、取材と撮影をさせてもらうため2度目に訪問した日は、図々しいことに、昼と夜の2回つづけて永山夫人の手料理をご馳走になってしまいました。話し始めると話題は建築だけにとどまらず、それからそれへと尽きない感じで、ついつい長居をしてしまったのです。中でも映画の話は盛り上がりました。私もそうですが、永山さんは映画は細部の細部まで賞味する人です。話題が黒澤明の映画に及ぶと、永山さんは、『天国と地獄』の山崎努が犯罪現場を確認に行くところのパーゴラの縞模様の光の効果や、『七人の侍』の村人がゾロゾロ連なって長老に相談に行くところの神々しい光線についてなど、「映画において自然光がどれほど効果的かつ魅力的か」について熱っぽく語りました。

このとき、私は、『Nハウス』を見学しているあいだ中、私の身体にピタリと寄り添っていた無音の通奏低音が「自然光」であったことに突然気づき、思わず膝を打ちました。「Light is the Theme」というルイス・カーンの名言が、流れ星のように脳裡をよぎって消えました。✽

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。